

日常のなかの創造的行為：ハンドクラフトを中心に Creations in Everyday Life: On Hobby Handcraft

青山 征彦[†]

Masahiko AOYAMA[†]

[†]成城大学社会イノベーション学部

Faculty of Social Innovation, Seijo University

aoyama@seijo.ac.jp

概要

本報告では、日常のなかの創造的行為として、ハンドクラフト、なかでもアクセサリ制作という趣味に注目した。アクセサリの制作は、既製品が高価であるために、模倣して制作しようとするのがきっかけになりやすいが、その容易さが趣味の長期にわたる継続につながっているとも考えられる。本報告では、こうした観点から、日常のなかの創造的行為に注目する意義について論じる。

キーワード：創造的行為 (Creations), 趣味 (Hobby), アクセサリ制作 (Accessory Making)

1. 問題と目的

本報告では、若い女性が趣味で制作しているハンドクラフト作品、とりわけアクセサリ制作に注目する。趣味の実践は、誰にも頼まれていないのにもかかわらず自発的になされること、長期間にわたって継続されること、といった点が特徴的である。趣味は、教室でも仕事場でもない生活文脈での学びとして、学習研究の文脈からも興味深い。例えば、他人のつけていないアクセサリを制作したいという動機が見られることを考えれば、日常における創造性という観点からも興味深い行為である。

そこで、本報告では、アクセサリ制作という実践についてのインタビュー調査の結果をもとに、日常における創造性について検討してみたい。

2. 方法

本報告におけるインタビュー調査の内容は、青山 (2017,2018,2019) で、すでに公表されたものである。本報告のうち、インフォマントH、Nの発言がそうである。いずれも大学生の女性である。

本報告では、さらに1件の新たなインタビューを追加している。このインフォマントTは、アクセサリ制作を趣味とする大学生の女性で、少量ではあるが販売も行っている。

3. 結果と考察

(1) アクセサリ制作を支える社会-技術的アレンジメント

青山 (2017,2018,2019) を踏まえて考えると、アクセサリ制作という趣味は、参入と継続を支える豊富なリソースに支えられている。

まず、参入のしやすさという点について考えてみると、YouTube や Instagram の動画で制作のプロセスが紹介されていること、そこで必要なレジンやハンドクラフト用のパーツなどが、100 円均一ショップで入手できることが挙げられる。

B：レジン液百均でも売ってるよって教えてもらって。で、それで、あ、ほんとかって思って作りました (略) フレームはやっぱり百均なんですけど。売ってます。百均で。(略) いや、百均大好きなんで通ってましたね。

また、参入してから実践を継続していく上でのリソースも、豊富にある。例えば、100 円均一ショップにはないようなパーツは、貴和製作所などの手芸専門店でも入手できるし、ハンドクラフトに特化した販売サイトであるミネでは、パーツだけでなく他の作家の作品も購入できる。ハンドクラフトの委託販売店や、コミックマーケット、デザインフェスタのような催しでも、他の作家の作品を見ることができる。作家の SNS のアカウントをフォローしているケースも見られた。

(2) アクセサリ制作における創造性

アクセサリを制作するきっかけとして、青山 (2018) では、「友人に頼まれる」「イベントのため」「気に入ったデザイン」を挙げている。青山 (2019) では、「既製品の価格の高さ」「母親の影響」といった要因を指摘している。

このうち、制作を支える重要な要素として指摘でき

るのが、「高い既成品を買うより作る方が安い」という考えかたである。このことは、ほとんどのインフォマントが述べている。一例を示す。

H: (ハンドメイドのショップの作品は) 高い。めっちゃ高い。めっちゃ高いし、なんかこういうのも、本当になんか3000円4000円とかするじゃないですか。(略) 作れるんじゃないって思い始めて、やっぱそこから。

—やっぱあの、作り始めてから、作れるんじゃない?という感じになりました?

H: そうです、そうです。はい。これ全然頑張れば作れるよね?って思い始めて。

また、すでにある作品を模倣して作る、というのは、やはり趣味でアクセサリーを制作している人に共通してみられる傾向である。以下の例では、クリスマス用のアクセサリーにほしいと思ったデザインを保存しておき、それに似せて制作したという経験が語られている。

N: なんか、いろんなヘアアレンジ見てて—
—うん。

N: その中で、あなんかこれクリスマスのときいいな—って思って、ずっとマークしといて、みたいな。…感じです。

また、同じインフォマントからは、自分が推しているタレントのイベントのたびに新しいアクセサリーを作ると語っている。

N: わりとなんかライブの度に作ろうって思ってて、そのX (ネットで活動するタレント) のイベントがある度に新しいアクセサリーは今でも作ってます。

このように見ていくと、趣味のアクセサリー制作という実践では、まったく新しいデザインのアクセサリーが考えられることよりも、すでにあるデザインをそのまま模倣したり、イニシャルを追加したりするなどして若干のアレンジを加えたものが作られていることがわかる。

3) アクセサリー制作と他の実践との関係

アクセサリー制作という趣味が継続されやすいのは、

アクセサリーの制作そのものが目的というよりも、他の実践のためになされていることが多いからであるように思われる。基本的に、アクセサリーは自分で使用するために作られている。

例えば、少量ながら販売も行っている場合には、販売するために制作しているアクセサリーは「可愛らしい」ものであり、自分のつけたいアクセサリーとは必ずしも一致しないようである。

T: こういう可愛らしいのとかがあんまり好きじゃなくて、自分でつけるとなると。なんかちょっと個人的なのとか、あとは普通にリングとか…。

—あ、シンプルなの?

T: 金属のだけのほうが、自分がつけるとなると、好きなので。

趣味で制作されるアクセサリーは、芸術的な作品とは異なり、アクセサリーを制作すること自体が目的ではない。もちろん、アクセサリーを制作するのも楽しみのようだが、制作したアクセサリーを使用することも重要であるように思われる。

4. まとめにかえて

このようなアクセサリー制作から垣間見える日常の創造性とは、模倣をベースにして、ちょっと一工夫、アレンジを加えるといった、ささやかな創造性であるように思う。このように模倣をベースにして制作することで、趣味が続けやすくなっているのかもしれない。同時に、アクセサリーは、自分のおしゃれやイベントのため、といった制作とは別の文脈が支えになっている。このことも、趣味を継続しやすくしている。

近年、認知科学の分野では、アーティストの創造性についての研究が見られるようになってきたが、本報告のような創造性は、こうしたアーティストの創造性とは、やや異なっているように思われる。芸術作品は、実用性を志向しないことが多く、基本的に模倣には否定的であるが、アクセサリーは実用的で、模倣をもとに制作されているからである。

このように考えると、日常における創造性は、芸術的な創作活動とはだいぶ異なるものである。しかし、そうした活動が、日常を豊かにする。こうしたささやかな創造的行為は、生活文脈であるために光が当たり

にくい、創造性について考える上で示唆に富むものがあるように思う。

文献

- [1] 青山征彦 (2017). 趣味への参入をめぐってーレジンアクセサリー制作における野火的活動の実際. 日本認知科学会第34回大会.
- [2] 青山征彦 (2018). 継続的な実践を支える文脈: 趣味のアクセサリー制作を例に. 日本認知科学会第35回大会.
- [3] 青山征彦 (2019) 趣味の継続を支える社会ー技術的アレンジメントをめぐって. 日本認知科学会第36回大会.